

# ヨーロッパ諸語における接続法

Le subjonctif dans les langues européennes

下宮 忠雄  
Tadao SHIMOMIYA

1. 接続法 (conjunctivus) は本来、従属文を主文につなぐ際に従属文中の動詞がとる形式 (We wish, propose, demand that he *come* at once.) のことである。接続法はサンスクリット・ギリシア・ラテン語のような古典語において確立していたのに反して、近代のヨーロッパ諸語は、ロマンス語を除き、一般に弱化してしまった。直説法と接続法が最も美しい対照をなしているのは、スペイン語であると思われる (cant -as ~ cant -es; viv -e ~ viv -a)。ドイツ語もかなり立派である (sing -st ~ sing -est; leb -t ~ leb -e)。接続法の衰退に伴って、2つの現象が見られる：(1) 接続法を全く放棄して直説法を用いる；(2) 特別な形態はないが、迂言法を用いる (上掲英語の that he come の代りに、イギリス英語の that he should come)。

2. 動詞のもつ文法範疇 tempus, aspectus, modus, diathesis は、どの言語にも、その深層構造においては内在しているはずであるが、各言語はこれを強く表現したり弱く表現したりする。英語においては、テンスは義務的な範疇 (obligatory category) だが、アスペクトは義務的ではない (optional category)。ロシア語においては、まずアスペクトが義務的であり、次いでテンスも義務的である。泉井久之助によると、話者の気分 (modus) が最も原初的な表現形式で、次ぎに行為の過程に対する見方の区分、すなわち aspectus が生じ、最後に tempus の表現が来たのであるという。発達の順序は modus → aspectus → tempus であるが、この3者は一応独立しながらも、1個不漸の連続体である、とも言っている (『言語構造論』1947中の「格と時称の発達」p. 72)。

3. 古典ギリシア語は接続法と希求法 (optativus) を区別していたが、ラテン語ではこれが接続法のみとなり (conjunctive-optative syncretism)、ゴート語では形態論的に希求法のみとなった。ギリシアの文法家は直説法以外の法を egklíseis (= inclinationes) と呼んでいた (Brandenstein, p. 128)。接続法のギリシア語 hupotaktiké をラテン語は subiunctivus と訳し、後に coniunctivus と訳した。paideuétō 彼は教育せよ (命令), mē paideúēi 彼は教育しないかもしれない (接続法, 謙譲な否定), paideúoi 彼が教育してくれればよいが (希求法)。

ゴート語 bairai (彼は運ぶべし) はギリシア語 phéroí と形態的に一致し、ドイツ語の er singe, er lebe, er trage などの -e と正確に一致している。

4. 接続法の用法を F. Sommer にならって、概観すると、

(1) hortativus: ギ fömen (行こうよ) = 現ギ pâme, ラ eāmus, フ allons.

現代語は、それぞれくふうして、直説法と区別している：

{	Nous allons.	{	Wir gehen.	{	Sie kommen.	あなたは来る。
	Allons!		Gehen wir!		Kommen Sie!	あなた、いらっしゃい。

(2) jussivus: フ Qui m'aime, suive. われを愛する(ような)者は、われに従え。Qu'il vienne! 彼が来てくれますように。ド(文語) Er komme! 彼は来るべし。

(3) prohibitivus: ギ(アオリスト) mē poiēsēs(そんなことを)するな。=ラ nē fēceris, ne faciat. フ Personne ne vienne! だれも来ないように。スペイン語では cantas(きみは歌う)だが、否定命令は no cantes(きみは歌うな)と接続法を用いる。3人称も同じく usted canta(あなたは歌う)だが、no cante usted(あなたは歌うな)のように接続法となる。

(4) prospectivus: 展望法。未来の意味をもつ。英語の will は本来、願望を表わす。

(5) dubitativus: 疑い、不確実を表わす。ギ tí poiô? =ラ quid faciam? 何をなすべきか。ゴ hwa qithau? (形態は optativus) =ギ tí eípô? 私は何と言うべきか。ド Was täten wir jetzt? われわれは(はたして)いま何をしたらよいか。

5. 感情表現の場合は、事実であるにもかかわらず接続法を用いる。フ Je suis heureux que tu sois venu; ス Me alegro de que hayas venido; =イ Sono lieto che tu sia venuto. ドイツ語は直説法: Es ist schön, dass du da bist. 英語にも It is a pity that the jewel should be given away. (その宝石が譲り渡されるとは残念だ)のような使い方がある。

フランス語・スペイン語・イタリア語等は、ラテン語になかった条件法(conditional)を発達させた。S'il faisait beau temps, il viendrait. もし天気がよければ、彼は来るだろうに(しかし悪天なので、来ない)。

6. 間接話法における接続法はドイツ語特有のものである。

= He says (that) he is tired.

= ド Er sagt, er sei müde.

フ Il dit qu'il est fatigué. (英語と同様、直説法)

ラ dicit sē fessum esse. (acc. c. inf. の構文)

オランダ語は英語と同じだが、従属文中の動詞の位置がドイツ語式(Endstellung)である: Hij zegt, dat hij moe is. = Er sagt, er sei müde (dass er müde ist).

Hij zegt, dat hij komt. = Er sagt, er komme (dass er kommt).

Hij zei, dat hij ziek was. = Er sagte, er sei krank.

Hij zei, dat hij ziek geweest was. = Er sagte, er sei krank gewesen.

オランダ語には時制の一致があるが、ドイツ語には見られない。

化石化してしまったオランダ語の接続法の名残りとして, Kwam hij toch. = ド Käme er doch! 彼が来てくれたらよいのに。Was hij toch gekomen. = Wäre er doch gekommen! 彼が来てくれたらよかったのに。

Ik had je graag gezien. も同じく直説法だが, ド Ich hätte dich gern gesehen. (きみに会えていたらなあ)に当たる。

ドイツ語の間接話法における接続法も、口語においては、衰微の傾向にある。Er sagt, er sei krank. だが、接続詞 dass を用いれば、それだけで伝達内容であることが明瞭なので、直説法で, Er sagt, dass er krank

ist. となる。これは W. Havers の Abneigung gegen Übercharakterisierung (p. 164; 余計な特徴付けを避けること) の事例である。接続法は直説法と区別する機能をもつ: Er behauptet, er habe es gesehen. (彼はそれを見たと言っている) に対して Er behauptet, sie hätten es gesehen. (彼は彼らがそれを見たと言っている) においては、接続法過去 hätten が明瞭性を期するために (klarheitshalber, W. Havers, p. 129) 用いられている。伝達文 (直接話法) だけならば, Sie haben es gesehen. となる。

ゲルマン語域 (Germania) の最北端に位置するアイスランド語は、語彙も文法も古風さを残しているが、接続法についても同じことが言える。ドイツ語と同様、間接話法に接続法が用いられる (例は Stefán Einarsson, p. 157 より)。

Hún fer heim á morgun. (彼女は明日家に帰る) → Hann segir, að hún fari heim á morgun. (現在);  
Hann sagði, að hún foeri heim á morgun. (過去)

ドイツ語と異なる点は (1) アイスランド語では伝達者の主語と異なる場合に、この構文が用いられること、(2) 接続詞 að が必要であること、である。

伝達者と伝達文の主語が等しい場合は、ラテン語のように acc. cum inf. が用いられる。Jeg er ekki heima. (私は家にいない) → Hann segist (過去: sagðist) ekki vera heima. (= Er sagt, er sei nicht zu Hause.) この hann segist vera は hann segir sig vera という再帰代名詞から来ており、ラテン語 dicit (dixit) sē velle = er sagt (sagte), er wolle と構文が一致する。

7. ロシア語の接続法は非常に簡素で、直説法過去 + by (byt' "to be" の接続法) である。ja znal by = I would like to know (知りたいものだ), if I knew (もし知っていたら、実際には知らない), if I had known (もしあの時に知っていたら、実際には知らなかった) の3者に当たる。例を山崎氏の著書から借りる (p. 144 ff.)。

Ja xočú, čtoby on vernúlsja. 彼が帰ってきてくれればよいのだが。

Tól'ko by on vernúlsja. 彼が帰ってきてさえすればなあ。

Pošél by dožd'! 雨が降ってくれるといいのだが。

婉曲法は英語を始め多くの言語と共通している。

Ja xotél by byt' čem-nibúd' polézen. 何かお役に立ちたいのですが。

Mne xotélos' by pogovorít' s diréktorom. 所長さんとお話したいのですが。

ポーランド語も、ロシア語と類似しているが、by が人称変化する分だけ、形態が豊富である。接続法とは言わず、条件法 (Konditional) と言っている。

過去 + bym, byś, by, byśmy, byście, by

pisać (書く) の変化: pisábym, pisábyś, pisáby, pisálibyśmy, pisálibyście, pisáliby のようになる。  
czytać (読む) の用例: chętnie bym czytał (または chętnie czytałbym) 私は読みたいのに。読みたかったのに。chętnie = "gern"

8. リトアニア語 (litauisch) は、すべての人称において、直説法とは異なる接続法の形態を保っている。dirbti 「働く」

直説法		接続法	
1. dirbu	dirbame	1. dirbčiau	dirbtume
2. dirbi	dirbate	2. dirbtum	dirbtute
3. dirba	dirba	3. dirbtų	dirbtų

用例: Jis nóvi, kàd àš dirbčiau. “He wants me to work.”

英語と異なり, that 構文を用いている。

9. 現代ギリシア語においては, 直説法と接続法を文字の上ではかなりの部分が区別できるが, 発音上, 現在形は区別がない。アオリストのほうが, 相違が明瞭になる。

直説法現在	接続法現在	直説法 aorist	接続法 aorist
1. gráphō [-o]	gráphō	égrapsa	nà grápsō [-o]
2. grápheis [-is]	gráphēs [-is]	égrapses	nà grápsēis [-is]
3. grápei [-i]	gráphe [-i]	égrapse	ná grápsēi [-i]
4. gráphome [-ome]	gráphōme [-ome]	egrápsame	ná grápsōme [-ome]
5. gráphete [-ete]	gráphete	egrápsate	ná grápsete
6. gráphoun [-un]	gráphoun	égrapsan	nà grápsoun [-un]

10. 言語経済性。古典ギリシア語は上掲のように Konjunktiv と Optativ をもち, それぞれ modus voluntatis, modus desiderii と定義されていた。後者は後に modus imaginialis (想像を表わす法) に用法が広がった。しかし, そのいずれも意味・用法が近いことが, Konjunktiv-Optativ 融合の原因となった。オーストリア民謡 *Warst nicht hinausgestiegen, warst nicht herabgestiegen.* (降りなかったら, 倒れなかったのに) は, 文語ならば, *Wärest du nicht hinausgestiegen, so wärest du nicht herabgefallen.* と接続法を用いるところである。ブルガリア語も接続法の代りに直説法を用いる (Fr. Vymazal, p. 45)。

ギリシア語は Homeros からの古典的な希求法 *eíth' hōs hē bóoimi* “wäre ich doch noch so jung!” (私がまだそんなに若かったらよいのに) をもち, この *-oi-* がゴート語の *-ai-* となって現れるのだが, ラテン語では, *utinam divēs sim!* (金持ちになりたいものだ), *utinam adesset!* (彼がいてくれたらなあ) と接続法が用いられる。

フランス語 *Si tu as le temps et qu'il ne pleuve pas...* (もしひまがあって, 雨が降らなければ) において, *tu as* の部分は *si* によってすでに仮定が示されているので直説法が用いられ, 多機能の *que* (谷井博樹氏はこれを万能の *que* と呼んでいる) はここでは *si* の代りを務めているので, そのつながり (*liens modaux*) を明確にするために接続法になっている (例文は Pottier, § 193 より)。同様に, *S'il prend le train, je le lui paierai.* = *Qu'il prenne le train, je le lui paierai.*

譲歩 (*concessivus*) も本来は希求法に含まれていたが, 現代語では接続法の用法になっている。Der Feind *komme, er wird uns gerüstet finden.* 敵が来るなら来るがよい, われわれが武装しているのを知るだろう。成句的な *soit...soit...* (...であれ, ...であれ), *qui que ce soit* (それがだれであろうと), *advienne que pourra* (何が起ころうと)。また, *que je sache* (*soweit ich weiss, as far as I know* は直説法) は可能性・不確実の希求法であった。ギリ *eípoi án tis* (= *dixerit quispiam*) だれか言うかもしれない。

11. 危惧を表わす接続法。ラテン語 *timeō nē veniat* 「彼は来るんじゃないか、来なければよいが」、*timeō ut veniat* 「彼は来ないんじゃないか、来てくれればよいが」のように、接続詞 *ut* は望ましい内容（目的も含む）、*nē* は望ましくない内容を表わす。*edō ut vivam* 私は生きるために食べる、*edō nē moriar* 私は死なないように食べる；*moneō ut hunc librum legās* きみがこの本を読むことをすすめる、*rogō nē hunc librum legās* 頼むよ、この本を読まないでくれ；*timeō, nē moriātur* 心配だ、彼が死にませんように。*utinam divēs essem!*（金持ちだったらなあ）の *utinam* はこの用法の拡張である（*nam* なんとすれば、とにかく）。

フランス語は *Je crains qu'il [ne] vienne.* 彼は来はしないだろうか。*Je crains qu'il ne vienne pas.* 彼は来ないのではあるまいか。*Je ne crains pas qu'il vienne.* 彼が来たってかまわない；の3区別があり、スペイン語も *Temo que él venga.* 彼が来そうだ（いやだな）；*Me temo que él no venga.* 彼は来ないかもしれない（困ったな）、ロシア語も *bojús', čto on priédet.* 彼が来なければよいが、*bojús', čto on ne priédet.* 彼が来てくれればよいが（2つとも直説法）、*bojús', čtoby (kak oby) on ne priéxal.* 彼は来ないでほしいものだ（接続法）の区別がある。ドイツ語も直説法を用いて *Ich fürchte, dass er kommt.* (Hirt) 彼は来るかもしれぬぞ。

12. フランス語から従属文中の接続法の例を追加すると、*Je veux que tu dises la vérité.* きみが真実を語ってくれることを望む；*J'ordonne que tu sortes tout de suite.* きみがすぐ出発することを命じる；*Je doute qu'il ait réussi à l'examen.* 彼が試験に受かったことを疑う；*Il faut qu'elle vienne aujourd'hui.* 彼女は今日来なければならぬ；*Il semble qu'elle aille mieux.* 彼女は快方に向かっているようだ；*Je cherche un étudiant qui puisse parler français.* 私はフランス語を話せるような学生を一人探している。以上は、ある教科書から借りた、いずれも模範的な文例である。

スペイン語も用法は概略共通している。*El profesor espera que los alumnos escriban en español.*（生徒たちがスペイン語で書くことを先生は期待する）は願望の接続法、*El profesor espera que los alumnos escribirán en español.*（生徒たちがスペイン語で書いてくれるだろうと先生は期待する）は実現を予期して直説法未来が用いられている。*Creo que los alumnos son aplicados.*（生徒たちは勤勉だと思う）は直説法だが、*No creo que los alumnos sean aplicados.*（生徒たちは勤勉だとは思わない）は接続法になる。*Conozco una chica que habla español.*（スペイン語を話す少女を知っている）は直説法だが、*Busco una chica que hable español.*（スペイン語を話せるような少女を探している）は「現在未確定、希望的」なものとして接続法が用いられている。また、スペイン語では「日曜日に来てください、お願いします」という時、*Le ruego venir el domingo.* と不定詞句を用いることができるが、*Le ruego que venga.* と従属節を用いたほうが丁寧な表現となる。同様に、*Le ruego mandarme.* 「送ってください」～*Le ruego que (usted) me mande.* 「送ってくださいますか」(H. Brügel, *El español básico, primera parte.* Wolfenbüttel 1957. より。ドイツ商業学校用の入門書だが、いつも恩恵を受けている筆者にとってありがたい本)。

*Ojalá él no venga.*（彼が来なければよいが）はポルトガル語では *Oxalá ele não venha.* または *Tomara que ele não venha.* となる。*ojalá, oxalá* はアラビア語起源の感嘆詞なので、スペイン、ポルトガル南部、Lisbon で、*tomara* はポルトガル北部およびブラジルで用いられる。

13. 条件法はロマンス語における新しい創造で、未来の語尾を半過去の語尾に変えたもの（*je chanterai*→*je chanterais*）である。事実と反する仮定、控え目な表現（*je voudrais vous dire, ich würde Ihnen sagen*）、推測（*il serait déjà arrivé, er wird schon angekommen sein, he will have arrived already*）、過去における

未来 (il dit qu'il viendra demain → il a dit qu'il viendrait le lendemain) を表わす。英語・ドイツ・ロシア語などは、特別の形態法をもたず、接続法で表現される。

スペイン語 como si fuera esta noche la última vez (今宵があたかも最後であるかのように、接続法過去) はフランス語では直説法過去 (comme si cette nuit était la dernière fois), 英語は条件法過去 (as if tonight were the last time), ドイツ語は接続法過去 (als ob heute nacht das letzte Mal wäre) となる。

14. 従属文を導く接続詞 that. ゲルマン語では that, dass, dat, at, ロマンズ語では que, che, să (<ラ si), ロシア語は čto [<\*kwi-to], ラ ut, uti “wie, dass” [cf. u-bi “wo?”], ギ hína, na “dort, wo, damit” [Analogiebildung zu verschwundenem \*tina, demonstr. und interrog., -na instr. suffix, J. B. Hofmann, Griechisches etymologisches Wörterbuch, München 1949] が用いられる。

15. まとめ。接続法を形態論的に豊富に保持しているのはロマンス諸語, ドイツ語, アイスランド語, リトアニア語, 乏しいのは英語, オランダ語, デンマーク・スウェーデン・ノルウェー語, ロシア語などである。ドイツ語の口語では間接話法における接続法の用法は少なくなり, 大会開会の辞で「イタリア語における接続法の死」などの声も聞かれたが, 1975年, Salamanca の学生寮で友人が言った cuando te despiertes, me llamas (起きたら呼んでくれ) の接続法 despiertes などに接すると, まだまだ健在なのだなあ, と思わざるを得ない。

16. résumé. Le subjonctif, bien établi dans les langues classiques (sanskrite, grecque, latine), a été réduit plus ou moins dans les langues d'Europe moderne à l'exception des langues romanes. L'espagnol montre un beau contraste entre l'indicatif et le subjonctif (cant-as ~ cant-es), aussi l'allemand (sing-st ~ sing-est). Les langues à subjonctif morphologiquement riche sont romanes, allemande, islandaise, lituanienne, celles à subjonctif morphologiquement pauvre sont anglaise, néerlandaise, danoise (suédoise, norvégienne), russe, etc. La réduction morphologique du subjonctif a entraîné deux phénomènes: (1) on emploie l'indicatif en renonçant au subjonctif; (2) on emploie des formes périphrastiques au lieu des formes spéciales.

#### [Bibliographie]

Brandenstein, W.: Griechische Sprachwissenschaft. Bd. III. Syntax, 1. Berlin 1966.

Dambriūnas, L. et al.: Introduction to Modern Lithuanian. New York 1972.

Damerau, N.: Polnische Grammatik. Berlin 1967.

Einarsson, Stefán: Icelandic. Johns Hopkins University Press, 1949.

Havers, W.: Handbuch der erklärenden Syntax. Heidelberg 1931.

Hirt, H.: Handbuch des Urgermanischen. Bd. III. Syntax. Heidelberg 1934.

Ito, T. (伊藤太吾): スペイン語からルーマニア語へ。大学書林1990.

Izui, H. (泉井久之助): 言語構造論。大阪(創元社)1947.

Jespersen, O.: The Philosophy of Grammar. London 1924.

Kalitsunakis, J.: Grammatik der neugriechischen Volkssprache. Berlin 1963.

Meckelein, R.: Polnische Grammatik. Berlin-Leipzig 1926.

Pottier, B.: Linguistique générale. Paris 1974.

Thumb, A.: Grammatik der neugriechischen Volkssprache. Berlin-Leipzig 1915. (前島儀一郎蔵書より)

Vymazal, Fr.: Die bulgarische Sprache. A. Hartlebens Verlag, Wien-Pest-Leipzig, o. J. (ca. 1890?)

Yamazaki, K. (山崎紀美子): ロシア語の構文。くろしお出版1990.